

八重山群島のトカゲ類の分布に関する新知見

林光武・森 哲・河村功一・小林秀司・山下晶子・太田英利

(京都大学野生生物研究会)

はじめに

竹富島は、八重山群島に属する面積6.7km²、最高点21mの平坦な琉球石灰岩島であり(図1)、テリハボクの卓越した照葉樹林並びにギンネム林が同島における主要な植生となっている。竹富島のトカゲ類としてはこれまでにキシノウエトカゲ *Eumeces kishinouyei* Stejneger, 1901, イシガキトカゲ *Eumeces stimpsonii* Thompson, 1912, ホオグロヤモリ *Hemidactylus frenatus* (Duméril et Bibron, 1836) が報告されている(当山, 1976b; 太田, 1983)。筆者らは、1983年3月14日に同島を訪れた際、新たにサキシマスベトカゲ *Scincella boettgeri* (Van Denburgh, 1912) とオガサワラヤモリ *Lepidodactylus lugubris* (Duméril et Bibron, 1836) を採集したので、現地です見した生息状況と併せてここに報告する。なお以下の標本は、太田が保存している。

採集記録

1) サキシマスベトカゲ *Scincella boettgeri* (図2A) 標本番号OPN930, 931, 1127-1151.

主な採集地は南部のテリハボク林(図1; a地点)で、落葉の堆積した林床は比較的乾燥していた。採集時は晴天で、林床まで木洩れ日が射し込んでいた。こうしてできた日だまりや林縁では多数の個体が静止・活動中で、近づくると落葉の下に潜るのが観察された。他に島の中部(図1; b地点)で、フェニックスの幹と葉鞘との隙間(地上20~30cm位)か

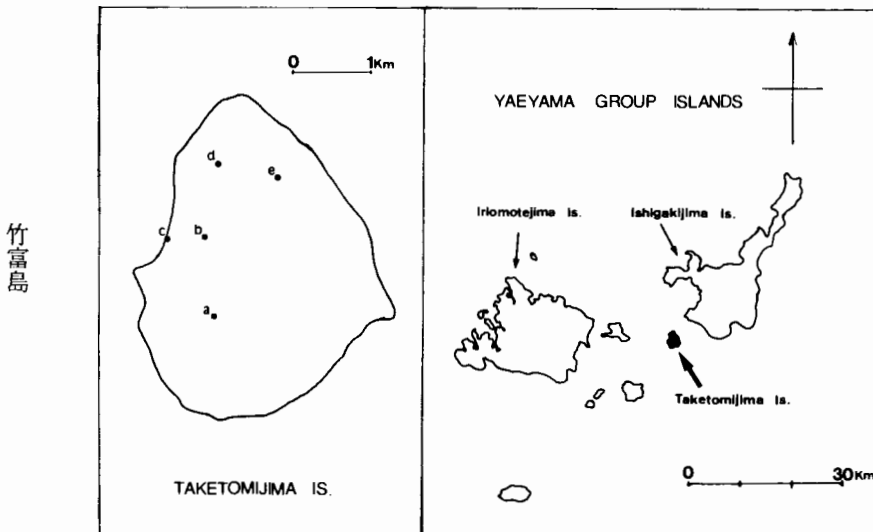


図1 八重山群島図 竹富島の位置および島内における採集地点(a~c地点:サキシマスベトカゲ, d~e地点:オガサワラヤモリ, 本文参照)を示す。

Fig. 1. The map of the Yaeyama Group and Taketomijima Is., showing the sampling localities (a-c; *S. boettgeri*, d-e; *L. lugubris*).

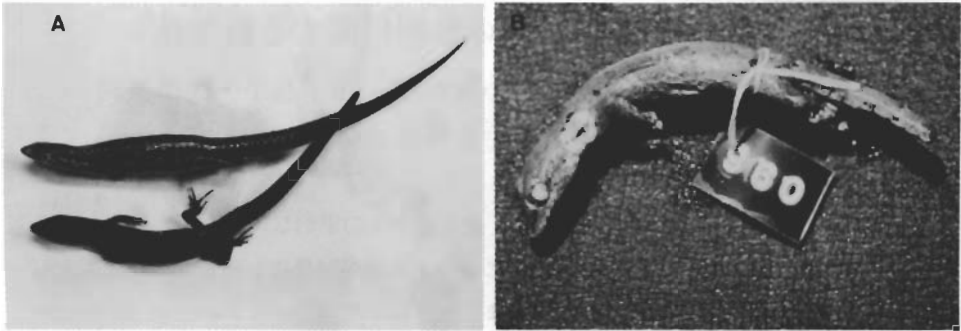


図2 A ; サキシマスベトカゲ, B ; オガサワラヤモリ.

Fig. 2 A; *S. boettgeri*. B; *L. lugubris*

ら1個体(OPN931)を,また島の西部の海岸近く(図1; c 地点)で, テリハボクを主体とした照葉樹林の外縁部の草叢から, 約3 m離れた岩の上で日光浴中の1個体(OPN930)を採集した。

2) オガサワラヤモリ *Lepidodactylus lugubris* (図2 B) 標本番号OPN1152~1157.

島の北部のそれぞれ異なった地点(図1; d, e 地点)で日中, 道路沿いに植えられたフェニックスの幹と葉鞘との隙間から, 計6個体(各2個体, 4個体)を採集した。他の50本以上のフェニックスのこのような部位にはホオグロヤモリ *Hemidactylus frenatus* が多数見られたが, 上記の2本には他のヤモリは見られなかった。ホオグロヤモリが葉鞘を動かすと素早く逃げ去るのに対して, 本種はその場に静止していた。

考察

サキシマスベトカゲは, これまでに宮古群島, 石垣島(基産地), 西表島, 黒島, 小浜島, 波照間島, 与那国島から知られていた(Van Denburgh, 1912; 中村・上野, 1968; 池原・下謝名, 1975; 当山, 1976a; 太田, 1983)が, 今回さらに竹富島からも記録されたわけで, 本種が, 地質, 地史, 地形にあまり関係なく, 環境が単調で生物相の貧弱な離島にも広範に分布していることがわかる。

オガサワラヤモリは, 近年になって沖縄本島, 宮古島, 石垣島, 黒島, 与那国島からつぎつぎと報告されており(柴田ほか, 1972; 当山, 1981; 太田, 1983), 今回西表島の大原集落内でも1個体が採集された(未発表)。本種は単為生殖を行うとされ(Hall, 1970), そのため移入された土地で定着し易いであろうことが度々指摘されてきた(千石, 1979; 当山, 1981; 原・山本, 1982; 太田, 1983)が, この問題については次に記す。いずれにせよ急速に分布を拡大していると思われ, 今後, 琉球列島の未報告地からも発見される可能性が高い。本種に限らず一般にヤモリ類は, 卵や成体が建材などの物資とともに運ばれて, 人為的に分布を拡大し易いと思われ(柴田, 1965, 1973), したがって生物地理学上の材料として取り扱う場合には注意を要する。

次にオガサワラヤモリをめぐる諸問題について, 主に柴田ら(1972)とKluge(1982)の考え方にしたがって紹介する。

Okada(1930)は小笠原群島の父島から, 新亜種 *Gehyra variegata ogasawarasimae* を記

載した。その後多くの研究者が父島産の個体群に対してこの学名を採用しており（例えば Makino & Momma, 1949; 中村・上野, 1968; Hall, 1970）, 和名には「オガサワラヤモリ」を適用している。その後 Shigei (1971) は *G. v. ogasawarasimae* を *Lepidodactylus lugubris* のシノニムとした。この間の経緯については柴田ら (1972) に詳しく報告されている。また和名としては新しく「ヒメヤモリ」が与えられたが、これに対し柴田ら (1972) は混乱を防ぎかつ日本における本種の分布地を記念する意味から種名を従来の「オガサワラヤモリ」とし、その属名 (*Lepidodactylus*) に「ヒメヤモリ」を当てることを提案している。その後、原・山本 (1982) は本種に対して、「オガサワラヒメヤモリ」という新称を用いているが、これは上記のような経緯をふまえた結果であろう。いずれにせよ和名は学名に比べて軽視され安易に取り扱われ易く、従来用いられてきた名称と、外国産の近縁種や海外における分布地についての知見を加味した新称との混乱が少なからず生じてきており、今後その取扱いに慎重を期するべきである。本種の分布全域を考慮した場合「オガサワラヤモリ」は必ずしも適切な和名とは言えないが、以上のことをふまえたうえで柴田ら (1972) の考え方にしたがっておく。

また、Makino & Momma (1949) は父島産の1標本の卵原細胞を観察し、63個の染色体を報告した。また Hall (1970) は小笠原の個体群の核型が $3N$ であり、単為生殖を行うことを示唆した。その後前述のようにたびたび、この見解に基き本種の分布拡大能力の強さが説明されてきている。これに対し Kluge (1982) は、Makino & Momma (1949) が本種の核型を $2N$ としていること、多くの、爬虫両生類の単為生殖を検討した研究者が Shigei (1971) の見解 (*G. v. ogasawarasimae* を *L. lugubris* — 単為生殖を行い核型は $2N=44$; Cuellar & Kluge, 1972 — のシノニムとした) を見落している（例えば Gorman, 1973; Cule, 1975）ことなどを指摘している。このような事情（特に Makino & Momma, 1949 の見解）や、単為生殖を行わないヤモリについて近年、人為的に分布を拡げたとと思われる例がいくつか報告され（例えば、柴田, 1965; 千石・松本, 1978）, 分布の拡大が必ずしも単為生殖の証拠とはならないことから、本種の倍数性単為生殖性についての、直接的な再確認が必要である。

謝辞

和名の問題について多く御指導下さった上野俊一博士（国立科学博物館）, 文献その他の紹介を含め、今回の調査全般にわたって御指導下さった松井正文（京都大学教養部生物学教室）, 疋田努（同理学部動物学教室）, 当山昌直（沖縄県立博物館）の各氏、植物について御教示下さった永益英敏氏（京都大学理学部植物学教室）に厚く感謝します。

参 考 文 献

- Cola, C. J. (1975) Evolution of parthenogenetic species of reptiles. pp. 340-355. In R. Reinboth (ed.), *Intersexuality in the animal kingdom*. Springer-Verlag, N. Y.
- Cuellar, O. and A. G. Kluge. (1972) Natural parthenogenesis in the gekko lizard *Lepidodactylus lugubris*. *J. Genetics* 61: 14-26.
- Gorman, G. C. (1973) The Chromosomes of the Reptilia, a cytotoxic interpretation, pp. 349-424. In A. B. Chiarelli and E. Capanna (eds.), *Cytotaxonomy and Vertebrata*

- evolution. Academic Press, N. Y.
- Hall, W. P. (1970) Three probable cases of parthenogenesis in Lizards (Agamidae, Chamaeleontidae, Gekkonidae). *Experimentia*, 26: 1271-1273.
- 原幸治・山本洋輔(1982) 両生・はちゅう類, 小学館の学習百科図鑑, 36, 小学館, 東京. 158 p.
- 池原貞雄・下謝名松栄(1975) 沖縄の陸の動物. 風土記社, 那覇. 143 p.
- Kluge, A. G. (1982) The status of the parthenogenetic gekkonid lizard *Gehyra variegata ogasawarasimae* Okada. *J. Herp.*, 16(1): 86-87.
- Makino, S. and E. Momma (1949) An idiogram study of the chromosomes in some species of reptiles. *Cytologia*, 15: 96-108.
- 中村建児・上野俊一(1968) 原色日本両生爬虫類図鑑. 保育社, 大阪. 214 p.
- Okada, Y. (1930) Notes on the herpetology Chichijima, one of the Bonin Islands. *Bull. Biol. Soc. Japan*, 1: 187-194.
- 太田英利(1983) 八重山群島の爬虫両生類相・I. 沖縄生物学会誌, 21: 13-19.
- 千石正一・松本健二(1978) 奄美大島古仁屋におけるヤモリ類の記録. 爬虫両生類雑誌 5(2): 12-13.
- 千石正一(1979) オガサワラヤモリ. 千石正一編原色1 両生・爬虫類. 家の光協会, 東京. p.21.
- 柴田保彦(1965) タシロヤモリの奄美大島からの記録. 大阪市立自然科学博物館業績, 9(18): 1-2.
- 柴田保彦・窪田正寛・石村貢(1972) オガサワラヤモリの沖縄本島・与那国島からの記録. 爬虫両棲類学雑誌, 5(1): 11-12.
- 柴田保彦(1973) 大阪港で採れた東南アジア産のヤモリ類2種. 爬虫両棲類学雑誌, 5(2): 21-22.
- Shigei, M. (1971) Reptiles of the Bonin Islands. *J. Fac. Sci. Univ. Tokyo*, 12: 145-166.
- 当山昌直(1976b) 繁殖期のキシノウエトカゲの野外観察. 両生爬虫類愛好会誌, (4): 7-9.
- 当山昌直(1981) 宮古群島の両生爬虫類. 沖生教研会誌(14): 30-39.
- Van Denburgh, J. (1912) Concerning certain species and amphibians from China, Japan, the Loo-Choo Islands and Formosa. *Proc. Calif. Ac. Sci.* 4(3): 187-258.

Notes on the two Lizard Species newly collected in Taketomijima Island of the Yaeyama Group, Ryukyu Archipelago, with Reference to Some Problems on *Lepidodactylus lugubris* (Dumeril et Bibron, 1836).

Terutake Hayashi, Akira Mori, Koichi Kawamura, Shuji Kobayashi, Akiko Yamashita and Hidetoshi Ota (Kyoto University Wildlife Research Club).

A herpetological survey was made in Taketomijima Island of the Yaeyama Group on March 14, 1983. The new records of two lizard species—*Scincella boettgeri* and *Lepidodactylus lugubris*, for this island, obtained in this survey, are reported with some notes on the behaviour and distribution of these species in their natural habitat. The findings of recent publications on the nomenclature karyology and the reproductive biology of the latter are presented as well as comments on its recently expanding distribution.